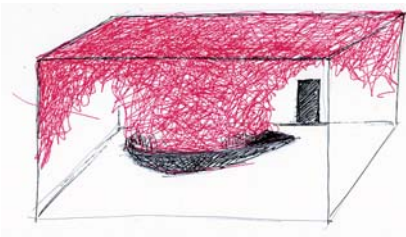


十和田市のまちを美術館にするプロジェクト「Arts Towada」が10周年を迎えたことを機に、現代美術館開館以来初となる常設作品の入れ替え、展示室の増築、寄託作品（※）の展示を行います。

※美術品の所有者が作品の所有権をとどめたまま、美術館で展示・保管する作品のこと。

【常設作品】 4月1日から公開

塩田 千春 ※作品名未定



作家は本市に作品を展示するに当たり、「十和田湖」に着想を得ました。十和田湖は22万年前の火山活動によって形成されたといわれており、水と深い関係を持つ十和田の地に、水に浮かびながら時間と記憶を運んでいく船をこの場所につなぎ留めるように赤い糸で編んだ作品を展開します。作品に使われている船は、十和田湖で実際に使用されていたものです。



しおた ちはる
塩田 千春
Berlin, 2020,
Photo by Sunhi Mang

1972年、大阪府生まれ。ベルリンを拠点に活動。生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」「存在とは何か」を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーション（空間全体を使って表現する手法）を中心に、多様な手法を用いた作品を製作する。

【常設作品】 12月から公開予定

レアンドロ・エルリッヒ 《建物ーブエノスアイレス》



今回、作家は故郷のアルゼンチン・ブエノスアイレスでなじみのあるファサード（建物の正面）を選びました。鑑賞者は、鏡の効果によって、重力に逆らうように自由なポーズを建物の表面で取ることができます。鑑賞者が作品の中に入り込むことによって成り立つ作品である一方で、ポーズを取る人々の様子とそれを内包した空間を観察する鑑賞者たちの存在など、鏡を介して複数の視点が存在する作品でもあります。



レアンドロ・エルリッヒ
@guyot

1973年、アルゼンチン生まれ。ブエノスアイレスとモンテビデオ（ウルグアイ）を拠点に活動。視覚的な構造を生かした作風は、目の前にある現実を捉え理解する能力を探り、見る行為の根本を問い掛ける。

【寄託作品】 4月1日から令和5年9月まで展示予定

名和 晃平 《PixCell-Deer#52》



「PixCell」は、インターネットを介して集めた動物の剥製や楽器などの物体の表面を、透明の球体で覆った彫刻作品です。

私たちがネットを介して見ている物体は、パソコンや携帯などの画面の細胞（セル）を介して見えています。「PixCell」は、普遍的となっている情報社会の現状を彫刻作品として表現しています。



なわ こうへい
名和 晃平

彫刻家／Sandwich Inc. 主宰。1975年生まれ。京都を拠点に活動。セル（細胞・粒）という概念を機軸として、彫刻の定義を柔軟に解釈し、鑑賞者に素材の物性がひらかれてくるような知覚体験を生み出してきた。近年では、アートパビリオン「洗庭」など、建築のプロジェクトも手掛ける。

関連イベント

塩田千春作品公開記念ギャラリートーク

とき 3月20日(土) 午後3時～4時
ところ 常設展示室、休憩スペース（カフェ）
定員 10人（事前受付優先・常設展のチケットが必要です。）
※新型コロナウイルス感染症の影響により、開催内容が変更になる場合があります。詳しくは現代美術館ウェブサイトをご覧ください。

3月10日(水)は常設展示市民無料デー

マイナンバーカード、免許証や保険証など住所が確認できるものを受付に提示してください。